



日用心法鈔後編

中

09
1303
5



口仁9
1.303
5

日用心法鈔後編中 目錄

- 一 世の長し短しを思ふ事 二丁
- 一 老のあはれを思ふ事 七丁
- 一 今年の日を思ふ事 九丁
- 一 念佛の余善を勝る事 十丁
- 一 何れの家より病入る事 十二丁
- 一 一家親類より迷惑する事 十八丁
- 一 子供の少く目鼻をあく事 廿丁
- 一 妻子の少くせはかせの事 廿五丁
- 一 大曲持の事 廿六丁

日用心法鈔後編中

目錄

く語る。其くせ朝ハカウと人ガあまを仕すのくから漸くと妻の女
 ちふふ。幸が利のど。わろびつ河。後ちか。如名。漬物の重名は
 由る。ぬ人。るの。漬物の重名。は。飯をたぐれ。が。大ま。よ。の。け
 ち。ども。い。人。の。飯。を。た。んと。た。ぐ。る。から。大。ひ。よ。こ。ま。す。の。飯。の
 食。た。ぐ。る。と。く。其。く。せ。よ。け。い。た。ぐ。る。こ。ま。の。こ。め。の。り
 ○け。の。ふ。る。人。と。い。ら。る。人。る。ぶ。り。の。大。事。の。お。も。い。あ。は。れ。ぬ。ぞ
 ○丸く。し。も。一。角。あ。ま。や。人。む。あ。ま。り。を。ま。い。こ。ろ。び。か。と。け。せ
 又。あ。ま。り。四。角。なる。も。こ。ま。る。一。寸。の。事。よ。も。腹。を。こ。く。少。く
 ぶ。り。の。割。い。び。で。理。屈。い。か。の。よ。も。こ。ま。る。歌。よ
 ○や。と。ら。う。よ。曲。い。び。習。人。か。り。そ。あ。よ。も。理。屈。す。一。言。禁。つ。ら。ぬ

○面白く。こ。ま。る。人。と。い。ら。る。人。る。ぶ。り。の。大。事。の。お。も。い。あ。は。れ。ぬ。ぞ
 幸が利と。名。く。よ。の。と。ま。く。直。よ。山。事。杯。を。あ。く。人。を。た。ま。を
 こ。の。月。猶。よ。の。か。り。る。り。大。げ。さ。よ。損。を。か。け。る。や。の。り。り
 少。し。も。油。ひ。き。ま。る。と。く。歌。よ
 ○福徳ハ。直。す。道。よ。何。る。物。を。ま。か。さ。る。心。を。た。く。む。あ。る。と。
 昔。か。ら。山。事。の。り。り。た。る。た。め。り。り。変。え。ら。る。山。事。を。後。ま。と
 ぬ。り。り。道。順。及。の。約。ひ。を。致。さ。る。福。徳。ま。む。へ。順。及。の
 約。ひ。よ。あり。と。知。る。べ。し。又。世。の。中。ハ。長。い。年。り。り。も。お。ほ。び。短
 い。年。り。り。も。お。ほ。び。四。角。を。年。り。り。も。お。ほ。び。在。い。年。り。り。の。四
 角。の。り。り。時。所。よ。り。り。長。く。も。短。く。も。丸。く。も。四

角もせ終るるにぬ事あり。然るにたほみ人一人あり。皆
 長とて。短過たり。丸過たり。四角過りの人半あり。智
 者のよの人とていひごと。智者のよの人とていひ長くと
 うの事とて長とて短とて。短とてよの事とて短とて短とて丸と
 も四角も時とて依とて臨機應変のよの事とて人の事あり
 是角中道の妙あり。智仁勇の三徳を備へたる人が
 あり。た者あり。たよとてた者一人もあり。皆長と短と丸と
 四角と人半とて一人後にはとまりがごと。家内をよくあさ
 まらぬ事あり。こふかひのふとてふとて何とて人半とて
 こふとて人半とて。こふとて人半とて。何とて人半とて。

たらるる人びるる人。國家の安穩は治まらぬ事あり。ゆ
 り。とれとて。一天万乗の天子様とて。孫とて。天
 名様とて。殿方とて。おとて。通りとて。何とて。ぬり
 夫とて。たまくとて。いふ。所かんあやくを起し。いふ。況や其外の者
 たり。猶更とて。いふ。よとて。ぬ事とて。あふ。け事を。篤とて。知らぬ
 と。毎日。腹とて。いふ。安とて。夫の。とて。家内。治まら
 ぬ事。人。とて。勤へて。人
 け。いふ。か。よとて。ぬ。家。家。とて。いふ。何とて。の。家
 よ。いふ。事。小言あり。いふ。も。何とて。秋の。夕暮とて。あふ。い
 何とて。いふ。も。荒神。様。とて。いふ。是。いふ。世の。あり。いふ。

あつ。人間はつづの付のるんぎとらんまうるり。人々の業報でるんぎ苦
勞もあつ。是の前世の善根のよの種をまかるんぎからのりや
あせよよの種をまけけ天よへでも生れく。らんぎ苦勞へるり
まごもよの種をまかむら。ごらんの種をまかむら。あま。難波
とるるり。は苦勞の家をより作りおしたる。罪科をまかむ。遊れ
かろがるの。そまよまよ。五濁悪時悪世界なれば。よの事なる死
の苦と知る人。是の我身より出くる業報るり。其上よ又飢饉
杯ありく。ヤレ米麥が高直の野に米物が少るの。何もかも高直
ぐらふ事が出まぬ。ヤレ西国が二分一奥州出羽が皆無同前
元米よりあつ。全一朱又八五百文とりかする。吐しをりたる。

それ付く。江戸も騒ぐ。火付盗賊多くあつ。少くも由とん
ありがら。夕部も何處へ押込がら。火事かいら。火事かいら。火事
あつ。夕部も何處へ押込がら。火事かいら。火事かいら。火事
ごらかけごといふ。あつ。ごらかけごといふ。あつ。ごらかけごといふ。
あり。苦のおよ相違る。地震かまら。大風大なる大火事。
まごん等あつ。少くも安ん。夫あ又行基をよの極楽
よあつ。ごらんが安ん。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
しと作せられたり。又江戸馬喰町如水先生の辞世よ
○公事けん。地震雷火事三日。らん病のる死國へ移
しよまれし。むら万るり。かかする。笑難わけく。かぞへる。

江戸の火事

ぞ樂よもろくもどあく。長く苦く多くるる。来々くと待
 くもく。福德ハまことしもこぬ唯来る者ハ来のよくと死
 カ来るどつりあまはつらつら待どとも急度来る其外のもの
 事ハ待どもくつらつら来事ととあるべし
 ○初をををやせん角とあ日。決りりる老の身とぞろりる
 け歌の心をくくくくく。何の功もろく来かあく。其は死
 る事をも覚悟あく。後日を願ハ法念仏を申しあべし。法
 念仏は天若大功德を得るの法るればをよかけく。急度買
 ぶ人を。法中第一の功德る。夫故。十方の諸仏方皆
 一同。初めあ念佛る。彌陀の本願念仏を申と者ハ必定

必定極樂ニ往生もるる。我を信合よとといめ。念仏を勧め
 む。誠よありがた念仏る。法華經ハ多宝一佛の證明る。一
 念仏ハ十方恒沙の諸仏の徳誠る。是經の現文る。法華經と
 阿彌陀經とをよく。よくあるべし。又十勝論五ハ云く恒沙乃如
 來舌を二千刹。覆ひく以て釈迦の言説の真るるを證明を
 此等の奇特ハ一代はたたく。各絶。諸經ハ於くも明る者な
 りとあり。是等の天徳皆念仏を不めあ慈ぶ。法華經の題目
 より。念仏の尊き事。百千万倍る。念仏より題目がありごと
 とあ。法華をよ。の何あまらる。兩經の現文をよ。念
 け。の向遠ハ。あ。よく。念仏を

神皆念念佛を勤めあふよくありて念念佛とあふべし
又八まん大がさの序歌よ

○いり人の我名は今あらはるる南無阿彌陀仏といふぞ
け序歌の如いり人の本地ハ弥陀如来なり今ハ八まんといふ神
は阿ふともくけ土の先生を哀愍も其昔の本願念仏を唱へ
極樂ニ往生せしむる兆載永劫の修徳の功德がわらうとてうれ
しくあふとの序歌よ 熊野大権現の序歌よ

○きたるれも清きも又よるる南無阿彌陀仏といふそ佛よ
け序歌の如いきたるいと罪のある事法然と云罪のち死事や
罪のある者もまたりのも更よるる南無阿彌陀佛と

一人申せば皆一同一人も佛とて往生とていふ序をり有智
無智持戒破戒善人悪人貴賤男女罪障の有るも南無阿彌陀
唯南無阿彌陀仏といふ一人もまたる十人の十人なる百人の
百人なる皆往生とていふ事有り誠はありて念仏も
是非とも唱へあふべし其外春日相根立山権現等の事お
もども中く又いひりかへて追々委委あふりての間
後なるさふべし

又何處の家よも取こまある何處の家よも存知もぬ積が
ある何所の家よも病人がある後成者がある何處の家よも言
事小言があるいひ事小言のるい家ハ一軒もろ唐天竺人

よくあつて仕合のころも、もそ指よく申さぬ。かうよある。これよ
竹く、あれあ一人のそ、う同うり世孫ばるらぬと知るべし。
沙石集八といふく、銭宝多き身を害し。名をけき、神ひを
害ととあり。是も又、る遠のるひ、来るれば、あまうり、やまこと、望
むよ及むと。あまうり、福德を、好むよ及むと。唯、是事を知りく。
身の不どくよ、く、とべし。福德安ん、は、あ、く、く、と、悲よ
○ 復とくも、家より、下を、く、く、く、其、身、く、の、不、ど、を、あ、く、く、
○ 草の葉も、そ、を、あ、く、く、の、ふ、あ、ま、う、り、重、た、く、あ、く、く、の、智、ひ、ぞ
○ 文選十といふく、聖人の功名の已、は、過るを、忌、寵、禄、の、量、は、踰、
を、恐、む、と、あり、聖人君子ハ、己、が、分、量、は、過、く、高、位、福、徳、ハ、受、

あ、く、く、の、身、の、不、ど、を、あ、く、く、く、あ、く、く、の、取、よ、と、
ま、う、り、あ、く、く、の、身、の、不、ど、を、知、り、く、く、。善、理、を、知、り、く、
高、位、福、徳、を、求、む、何、ぞ、得、べ、ら、ん、や、終、は、大、あ、ま、う、り、を、あ、く、く、家、
を、失、ひ、身、を、あ、く、く、く、又、く、く、く、ま、事、大、ひ、る、り、何、か、よ、も、聖、
人、智、者、の、る、く、く、方、を、学、ぶ、べし。何、れ、の、家、も、の、以、事、小、言、
あり、く、大、ひ、よ、く、く、事、る、り、。亦、く、く、の、前、の、家、も、く、く、。い、ひ
言、小、も、あり、病、人、も、あり、。役、攻、者、も、あり、。邪、魔、物、も、あり、く、
大、の、難、儀、苦、勞、る、り、銀、取、外、の、家、も、く、く、世、信、も、苦、勞、る、り、。隙、
ぐ、く、安、ん、と、思、ふ、大、る、遠、る、り、何、を、の、家、も、大、難、儀、あり、
何、事、の、事、も、年、中、大、い、と、が、く、く、く、く、余、取、の、世、信、も、

けあやぢらへ換をさるる。病より不仕合が残りくどおちりも。
 ちのち人もゆたがう。大秘談なうり出来く。日と夜とくら
 ぶ。今日ハ大安な福徳が来と。うまうやくくと悦んで暮を
 日ハ一日もるの常位をがたう。む事なるるるり家来けん
 ぞうへ。一何もあやうなる。一衣冠類より入迷惑子万を
 る事を申す。けい盡頼母子を一口何く下さ。おまへが
 かのく。下さるね。お角出来と盡頼母子が又あやうり
 まうらう。何れも一口ハ是非た。かのくもさ。と否惑る
 一。押付る。そとくは方る。一口か。又ハ何れも金巻は
 かあく。ちと。けい盡頼母子が。私ハ首をく。死る後ば

ちくぬ川へ。ぐも身をあげ福があ。ぬう。何れもわが
 頼の。もと。延引あ。ぬう。仕うけ。是よ。川と。是非
 ろく。かあく。ち。モウかへ。さ。難儀。千万。此上。入。る。べ。う。ら。む。サ
 是あ。ら。い。そ。つ。じ。と。い。が。さ。の。ご。と。一。休。の。哥。み
 〇。あ。の。お。え。さ。ぬ。せ。み。あ。ま。づ。い。そ。つ。じ。と。用。を。ま。き。り
 〇。見。る。遊。し。も。や。い。ろ。く。と。あ。ら。う。の。お。ま。り。中。と。き。入。公。あ。り
 かり。時。入。地。藏。顔。と。あ。ら。も。共。よ。か。へ。も。時。入。地。藏。顔
 と。あ。り。笑。を。ふ。ら。ん。ど。わ。へ。も。べ。い。是。分。本。意。あ。る。べ。い
 又。兄。弟。共。世。話。を。う。け。る。者。く。お。り。事。持。と。来。る。子。供
 の。世。話。を。申。せ。る。目。鼻。が。あ。く。と。ち。き。の。ま。ら。い。事。を。ま。る。

ある處の女房が親戀の公安い人よ喘ををきけが私等が
 鬼もどらうらくを初めと。こまうりまうとといへむヨヤクモウ
 吉原へ行くさう。子供おやくと思ふとくひこと言が左様で
 こごつりまうと。少しも油断がぬと。あげくのを聞と居こ
 次目鼻がひくと直の親達よ苦勞をわけ。あんぎ子万
 の世の中あり。孫わけ先生の狂歌よ
 ○おふむをぬぐひとどし。やどもあく。又わをむぬぬを
 此心の逆順まう。あふむをぬぐひとどし。かまうまう。中と思ふ
 るもあく。女郎買を始めと。又借金の尻をぬぐらを誡ふ
 世話をわけ。あんぎをわけ。子供ありといふをあり。此

通りよお遠く。油断まうとどし。又知音近付ハ皆あちふ
 且と。秘儀まう。居るとの車東をえとくも西をえとくもろく
 なちまう。い少しもきりぬホンニヤレ。一日一時も安んじ。け招
 子ぶら一生苦く死よ死。地獄へ行くより外る。誠は思ふ
 志死世のまうる日くる。このたもひまう。又年くよ
 苦しくも多くる。け招子ぶら行く。何やうの。なんだあ
 も志まう。毎日苦事といふ。い少しもせと。罪まう
 作りく居る地獄の種まう。振らくと居る。なんぎ子万の世
 の中るり
 夫とも又一家親親。飯米が入る。け持る。い少しも

日蓮心法録後篇中

二二二

そごくしたる。其恩を少くもせらば目も鼻もひらぐべし。
 あつこかうよあつこく。吾の親の大恩を報ぐ。わい少くも
 るの不孝子。親のむね。行かざる事。むづろつと。大罪
 とり入べし。救ふ。

○何んぞや。子の親のむね。親の親。あつこく。あつこく。あつこく。
 け救ふ少くも。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 て損とらふ者。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 一切の子。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 る。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 天下の。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 又。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。

皆事ありとも。福德安ん少くも。知るべし。御経は
 親孝の者。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 上り。又。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 慈け。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 行の。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 る。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 徳。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 又。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 と。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。
 ふ。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。あつこく。

数二拾人あまうりふ。家屋を地をたき物盡又少くする。金
 銀の貸付もあり。とやぐの重た物をのせ持する。又人よ
 川と人教五拾人百又百人又山を持。船を持。田地等
 持。又色くる株家督をたす。人もある。世物曲持へ下切く
 息をただ体むる。とやぐ命あらんかだり。持たけけ
 世ねむる。若誰よくも。身持少くも。む時へのせける物
 真よ。川を落る。とやぐ。何なる事。いん方なり。曲
 持りも。身持へ。とやぐ。六々。あか松中。いり。と申。とやぐ。
 むの事。いん。とやぐ。

○眞實は守る力の。いん。け。とやぐ。先。家。身。とやぐ。め。とやぐ。り。とやぐ。

○あやうとやぐ。世。後。業。とやぐ。ぬ。色。不。か。る。業。とやぐ。い。とやぐ。安。とやぐ。

け。秋。の。通。り。何。か。う。の。藝。能。も。上。の。よ。出。來。る。考。る。とやぐ。も。身。
 上。を。とやぐ。持。藝。が。玉。川。と。出。來。よ。く。外。者。とやぐ。り。琴。三。弦。の。上。
 の。繪。の。上。の。立。花。舞。舞。臺。の。上。の。い。ん。沢。山。は。あ。は。れ。身。上。
 を。上。の。よ。持。く。民。百。姓。を。よ。く。治。め。家。内。を。安。ん。とやぐ。く。養。
 ふ。人。の。とやぐ。希。成。者。とやぐ。り。い。ん。とやぐ。も。とやぐ。治。め。とやぐ。み。る。
 か。う。とやぐ。も。とやぐ。も。大。丈。夫。の。治。め。方。とやぐ。あ。ら。とやぐ。幸。ひ。とやぐ。とやぐ。
 む。ら。び。ぬ。の。とやぐ。何。年。先。渡。世。の。道。を。上。の。よ。とやぐ。とやぐ。其。上。とやぐ。
 て。強。ひ。舞。臺。の。湯。等。の。格。藝。も。上。の。よ。とやぐ。とやぐ。け。とやぐ。い。
 も。何。の。通。り。とやぐ。業。此。道。た。才。一。とやぐ。く。仕。とやぐ。其。後。とやぐ。とやぐ。

由角も。とのみ秋の通りよまぶ。一
 大家小衣下男下女。いたるとは物持と者人。くは不時
 災難をいひつけらるる事あり。迷惑する事あり。用心
 をせねば。直に盜賊災難あり。失ふ事とや。一物お
 たるりのいふ事あり。大論の餽をさく
 する鳥の毛も。あつて肥する羊も。さる板も。さるやう
 あり。ゆゑに賤賈を持と者人。人の知らぬ秘儀あり。重
 の如く。よお遠る。ある人大晦日は。唐人笛をふた餽
 を高山者をさく。苦樂の二川をあはせ。めく。旬よ。千金の
 商人の損益。苦志を。き。後。の商人の一日を樂しむ。とのみ

一も。あ。あ。あ。あ。一
 又親戚の冤家のごとし。けんくらの相中。中々の根木。あや
 との事あり。ま。の。ん。との。の。一切の公事。口論。喧嘩。の
 ん。を。知。ら。ざる。他人。と。さ。る。ま。者。あり。大方。の。親。子。兄。弟。知。音
 血付也。見。ま。と。あ。ら。ざる。人。との。公。事。口。論。の。知。ま。ぬ。者。也。蝦。夷
 松前九州薩摩の知らぬ遠方の人とのさうひへ出来ぬ者あり
 公事口論のいひざる。聾養子一家親なるり。序。經。の
 文。段。少。し。も。お。遠。る。一。秋。よ
 ○我為よ。あ。れ。ん。と。う。そ。あ。り。な。る。よ。あ。れ。の。中。く。む。の。う。れ。る
 ○親との。よ。取。よ。笑。ひ。ん。か。る。と。ど。あ。ま。る。者。と。あ。り。く。よ

廿四孝の淨瑠璃は竹は花と申のよきと、又指掉と云
 る時鳥の鳴るあざかごとあり。一家親類と申のよ
 けとつひる遠く時公車口論御番取沙汰と云る是
 も何れも起るといふ。大方の身傍の母の大欲う。起る事也
 兄弟の中も欲う。遠くごと親の世はあも時よりぞある
 伯父伯母や兄弟中も敵と云る。欲う邪見の法を有りけり
 親類の中も起るといふ。貪欲はあうその人はいぬも同前
 法華經の諸苦所因貪欲為本とありけり。諸の苦
 の因といふ。貪欲をりゆくと根本と為といふ事有り

一切の悪業。一切の苦。一切の皆欲より起る。欲のつゆが
 一切災の根本と云る。夫は十悪の中の大将なり。八万四
 千の衆のあはれ中の随つる。秋よ
 十悪をるる。十悪をるる。十悪をるる。貪欲の世のさるる
 一切の悪業の中。貪欲をるる。世のさるる。一切の災
 ひの皆欲より起ると知るべし。何卒けり。をよ。知りて
 正業より起ると。邪欲邪念。家身傍の母をわかく。親子
 兄弟一切の人と申す。親子兄弟知音近人と
 申す。くらくと。安んずる。と知るべし。孟子四よ
 しく父母俱存。兄弟故無。一つの樂有り。とあり。

利ある事を致さず。我身の榮耀榮花を少くも好むた
 事なかりき。古往の聖王智臣の行ひを勤へて。万民を安穩
 正養ひあべ。左様は行ひるべし。身も福壽象満る事
 疑ひる。能く考へて。仁徳を行ひあへ。又一國の事多くハ
 一玉の冠儀の元メ苦勞の大なる。一玉の玉とる。一玉の
 一國の榮耀榮花の大將安樂の元メ。うと思ひ。一玉大百遠ハ
 冠儀苦勞の大將とる。うと思はまらぬ者なり。是れは
 へばえ。あやくが。あつる。ほむ。万なり。結息。どの。是。け。世
 の習ひる。と。ば。あ。う。と。思ひ。辛抱を致し。は。く。堪忍
 多く。苦勞の元メ冠儀の大將を。は。と。め。あ。べ。一。是。を。能

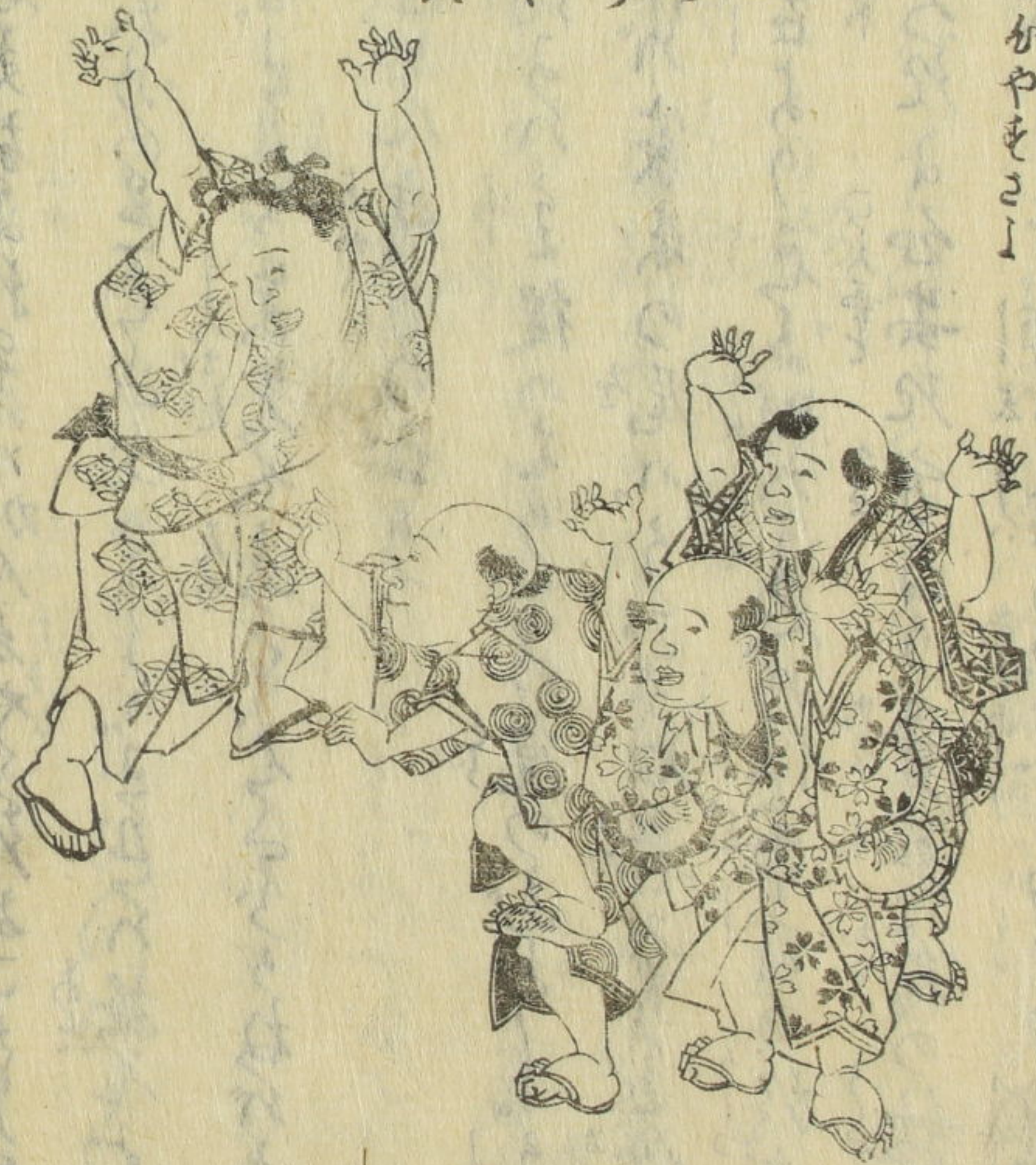
勤めぬ。人。る。う。が。う。の。人。と。ハ。る。り。ぐ。こ。一。こ。ら。は。よ。う。の。く。何
 ら。ど。の。は。く。く。堪忍辛抱を。あ。く。苦勞の元メ冠儀の大
 將を。勤め。あ。べ。一。は。あ。や。ば。を。苦の。玉。と。り。又。樂の。玉。と。り。言
 ぬ。然。る。が。苦の。あ。は。居。る。る。苦を。せ。ま。の。と。思。ひ。か。を。理。也
 樂を。仕。務。と。あ。く。こ。一。出。來。る。あ。は。あ。く。ど。樂。と。り。又。考。へ
 る。れ。世。界。な。り。樂。の。る。れ。世。界。よ。く。樂。を。せ。ん。と。思。ひ。た
 と。人。ハ。火。の。中。に。居。く。あ。の。火。を。ま。ら。ひ。水。の。中。に。居。く。ぬ
 ち。ま。ら。た。と。思。ひ。が。こ。一。大。ひ。る。る。を。理。な。り。榮。花。を。せ
 ん。樂。を。せ。ん。と。思。ひ。が。け。く。苦。勞。が。増。と。知。る。べ。一。ま。ど。苦。を
 苦。ま。せ。ま。ら。く。は。と。思。ひ。が。樂。の。來。る。事。あり。又。何。く。も

かぐも。樂を仕探くとあつと。指く苦勞増と知るべし。
 仕事能く侍知ありと。苦勞の本源。縁依の大。おん。
 務め。勤め。是をよく勤る人をよめ。人。
 といふ。人事をさく。天命を待の人。是を聖賢君。
 子の人といふ。天より幸福を興へる。人事疑ひる。人事を。
 天の福樂。得る。世より樂といふ。
 りのへけり。夫故。往古の聖人君子の身をよ。
 く。治め。家を齊へ。万民を安む。是を徳の樂と。
 いふ。以外の樂。徳の樂。あつと。皆苦の種。あり。
 仕事をとくと。知れ。聖人君子の真似。致さべし。

○世の中は苦なるもの。其樂を求め。後苦。苦しむ。
 和論。語より。苦を以て。樂とす。時。樂。まよ。する。
 る。樂を以て。楽とす。時。苦。是。隨。あり。
 けを。苦。を。樂。と。あ。べし。是。あ。
 く。苦。の。本。源。縁。依。の。大。お。ん。勤。め。る。べし。樂。
 又。其。中。に。あ。り。ま。よ。る。樂。隱。居。と。る。人。事。疑。ひ。る。こ。が。
 職。分。を。よく。し。と。む。る。外。に。樂。の。道。あり。と。知。る。べし。
 若。し。外。に。樂。を。求。め。ば。一。粒。万。倍。の。苦。を。あ。ら。せ。る。べし。
 け。を。求。め。る。人。事。疑。ひ。る。人。は。又。苦。也。
 ○福徳の末業の内は。何れと。す。ま。あ。ま。の。生。の。金。銀。の。藏。

○笛ふえをた鼓こおのりの獅子おし舞まいの
踊おどりとあらわかやまこし

獅子おしといきこやりお
をせやうとあんごこう
あんせやうとかしら
のついてもかしら
とつうやいのちらこ
大び事じありのちらこ
大あひよかやまこ



親尊の三畏の安きるる一猶火宅の如し。元苦元満と云ふ
 怖畏への金言を知りてよく人となる門あり。何れも
 家俣を仕指大安樂を仕指とある大間遠ひるる親
 尊の天子 大なる家俣安むる。其外の者大の大苦
 勞るるとして作せざるも又一切の主人たる者へ安むる家
 來たる者へ苦勞るるとして又隱居たる者へ安むる
 當職の苦勞るるとして仰せしむるも出家へ安むる在家の
 苦勞るるとしてのふらむも猫も投子も皆引くも三畏
 安猶如火宅と仰説るるれば此の三畏の中へ安む
 の要る。たとへん火の付る家の中へ居るがごとし

奥も端も皆あつたる一人も安むる者も一皆難依苦
 勞の者むらうらうといふ御をり。此經文をよめ合點を
 此の世の天子 大名とやう。安む安樂るる。一
 人おやう。家俣がらうといひいごとし。貴賤上下の
 難依苦勞の世界るる。此の世の中り。まじ苦を苦とせざる
 難依苦勞の世の中り。まじ苦を苦とせざる。若し安む
 るに治め家業を出指せざる樂と又其中にあり。若し安む
 家俣よくとらん事奉らば好む者へ大苦と來りて未
 だ大徳依まざるも。此の事よく知りて身を治め家業
 を出指せざる。安む福德の其中にあり。此の外へ安む福

徳の深き一くるたとあるべし。又けあわむる樂とのい
 者ハ一何ものも一凡夫の樂とて思ふ事ハ皆苦の種なり。
 夫れ又龍樹が云ふ所の大論云ハ一切の凡夫ハ苦の影に在
 りて樂とて思ふとあり。是れお違ふ。凡夫の樂と
 とあるの皆苦の種なり。亦云ハ世間は悦び樂とて言
 者ハ一何ものも一唯苦とむるなりと知るべし。夫れ又云
 凡皆苦と悦みハ御経あり。是ハ一色ハ相違る。後を聲を
 悦言。悦言禮目出たりといふは色ども後ハ色なるを
 ひがふらう。後儀苦勞とする。後ハ色なるを悦むとけ
 ども。一何ものも一亦云ハ一色ハ相違る。後を聲を悦言。悦言禮目出たりといふは色ども後ハ色なるを悦むとけども。一何ものも一亦云ハ一色ハ相違る。後を聲を悦言。悦言禮目出たりといふは色ども後ハ色なるを悦むとけども。

仕立がらう。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて
 仕立がらう。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて
 のよう。いさど。何れも又へりた。大苦勞と求たりとるげ
 だ。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて
 か。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて
 も。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて
 育る。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて
 依が。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて
 あり。お産物が少るいさどと色なる小言が出たて

且夫家業をつとめ家を治むるは樂もするべし。一は
 ○出世心をせんと思ふは身を修めくも死するの心をもせよ
 ○大切と思ふ家業は何れも万のたすら。ごまごまうそらむ
 保するまらうそ人の苦も大ひるまら。又樂も大ひあり。
 家業けんぞくも苦勞も少くも樂も又少らう。何
 事よと立人ぞ大苦勞よと何事よと公事ひ重く大
 身体程苦勞多し。亦も大身体の大苦勞を修人むらうと
 先大身体は修むる。大苦勞ありと知るべし。いひは大身
 体を持大勢の人を使ひたがら。大苦勞をくむと願ふの
 かや。家業一人使ふより二人三人はく大苦勞も多し。又

世人三十人百人もつとむ。猶更苦勞多し。たゞ一人のま
 づらうとて一人の怪我をまら。一人の煩ふ一人の喧嘩する
 一人の女落をもとといわ指は色く指の苦勞多し。又其ら
 らし。脚眼をむき抱くもむきと。いつかのもあつと中
 混雜らう。保しかやう大勢とするのし。佛も人の侍耳ふ
 も入らうむむ。亦も又佛家中の面々ののみ。且是非た
 二。侍耳よの色もむら。叶へるむら。また後義等を申
 付る事。又級々家督隠居申付る等ののみ。又八道教長
 の侍暇。眾科はゆる等の事あり。中々容易らぬ。侍苦
 勞る。侍身も重けら。又侍苦勞も重けら。何事も

知をよせむ。むの心す。くたきけ合道あり。士ひの士ひの
 道とてなむ。百姓の農業とて。商人商人は。家奴とて。よ
 勤を大上とて。言の人とりあり。武運長久家門。繁栄あり。け
 んくよあるべし。又何ぞ苦勞ぶも。出世せぬ人の。後立ぬ
 う。何程も出世とすべし。唯直は。衣業をほとめく。自然
 の福徳を求めあべし。是上々の君子あり。何ぞ難儀
 苦勞し。くも一軒の主人とする。かぬ人の。怒またぬ人と。知
 るべし。こまよの。何ぞ難儀とす。一軒の主人とす。な
 るべし。然れども。無程と難儀とす。ある人と。まゝの。大ひの。と
 事。何事も。因縁運命は。任まらば。出世あるべし。とす。

あり。若因縁運命あり。く。ある時。天も恨む。人
 とも恨む。と。家身を恨む。人。何ぞ引ひん。と。身くの。程
 程ふ。く。と。是を天命を知る。大上々の君子あり。と。いふ。べし。
 人と。ま。天命を知らむ。ん。君子といふ。何ぞ。と。論語
 の。末。人。天命を知。其止る所。止る。と。よ
 た。人。と。いふ。君子。た。人。天命を知る。第一の。む。あり
 人。事を。ま。と。仕合せ。不仕合せ。天命は。任まらば。又。人。と
 う。の。ま。人。の。方。よ。の。縁。の。無。非。あり。あり。
 是を。ま。と。付。る。た。か。よ。と。無。理。せ。む。程
 の。ま。と。と。無。理。を。い。無。理。を。ま。と。と。家。の。あ。

まろりぐりーとまろりへー

○鏡山人はまろりからさ死んてく。家身の上か入るるのま
 ○昔ある人をさるる目のありまろり我身の上か入るるのま
 け秋の心をさるる入る家身の上よ取らん。いさ死ねるり
 古語よりく。智人の前よ二尺の闇あり。況や愚人の前を
 やとあり。け通りよおぼる。智者賢人の前よ三尺の闇あり
 況や愚人の前よ五丈も十丈も千丈もかまくるるり。随
 ちと氣を付く。家身の非をさるるまろり。な後よ
 ぶぐけくもまろりぬるあまろり。人よいさせくまろり。後
 よまろり。何事よまろり。人のあまろり。家身のあま

見へぬ者あり。又家来けんぞくが。またや炭をたく時へ余
 斗よ。たくやうよ。まろりあり。又まろりたのくまろり。是
 まろりあまろりまろりくも。師へまろりぬるあり。是
 よまろりく人のまろり事をまろり。まろり。まろり
 まろりく人のまろりまろり。まろりくまろりあり。是まろり
 のひぐりまろり。急度心を付くひぐりまろりたかろり。まろり
 心を用ひまろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり
 身のひぐりまろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり
 人のまろり事をまろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり
 も。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり。まろり

中道の初ひありたり。又家来けんぞくハ。またまをよけいたくよお遠ゆ
 り。いづへぐたげバ。毎の法一をのよ。いさくハ。あ
 おめ一のあんぢいのく。出まゐるやうな。わどめいたくる
 王。まう。いづへぐも。所飯をたく。事ハ。あり。身上
 持の。まの。いづへぐハ。火をめと。事ハ。下。いづへぐ。昔より。夫故
 又年季者を抱へんと。思ふ時ハ。先火をたうせと。見
 く。よめ。たげバ。抱く。下。いづへぐ。たぐ。いづへぐ。火
 いづへぐ。火のたたかう。いづへぐ。身上持の。いづへぐ。あ。知
 る。いづへぐ。是。いづへぐ。火のたたかう。いづへぐ。火をたけいづへぐ

わどめいたくる。易。いづへぐ。身と。法。の道他。其。不善を。速。改。り。以。て。善。後。而。已。と。あり。是。學。文。の。第一。也。學。文。を。ま。ま。本。意。の。家。身。の。あ。く。を。ま。ま。其。惡。を。あ。く。善。を。ま。ま。為。る。り。是。を。本。乃。の。學。者。と。い。ふ。家。身。の。あ。く。を。ま。ま。い。づ。へ。ぐ。大。福。德。安。ん。を。得。る。の。道。る。り。又。家。子。の。愛。又。は。か。あ。が。ま。い。我。子。を。い。づ。へ。ぐ。可。む。が。り。家。来。入。む。い。づ。へ。ぐ。ひ。ら。く。ま。い。る。人。あり。い。づ。へ。ぐ。い。づ。へ。ぐ。家。子。を。い。づ。へ。ぐ。ま。ま。く。家。来。丁。推。を。い。づ。へ。ぐ。い。づ。へ。ぐ。我。子。を。い。づ。へ。ぐ。い。づ。へ。ぐ。由。家。信。を。い。づ。へ。ぐ。い。づ。へ。ぐ。人。教。を。さ。せ。ぬ。や。う。い。づ。へ。ぐ。是。を。其。實。又。我。子。を。か。し。づ。る。

巨用心法録後序中

四十九

とりし 聖神より御書様人ほつるまじし御文章を終
かんぐらるべし。上様方々。孝子より侍をさせまじし人自をさせ
あつて況や百姓町人のかとまじし。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
せらるる大いよらうし。若氣候。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
おごり者とる。家を失ふべし。こぼれまじし。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
く。家らる。丁推をい。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
まじし

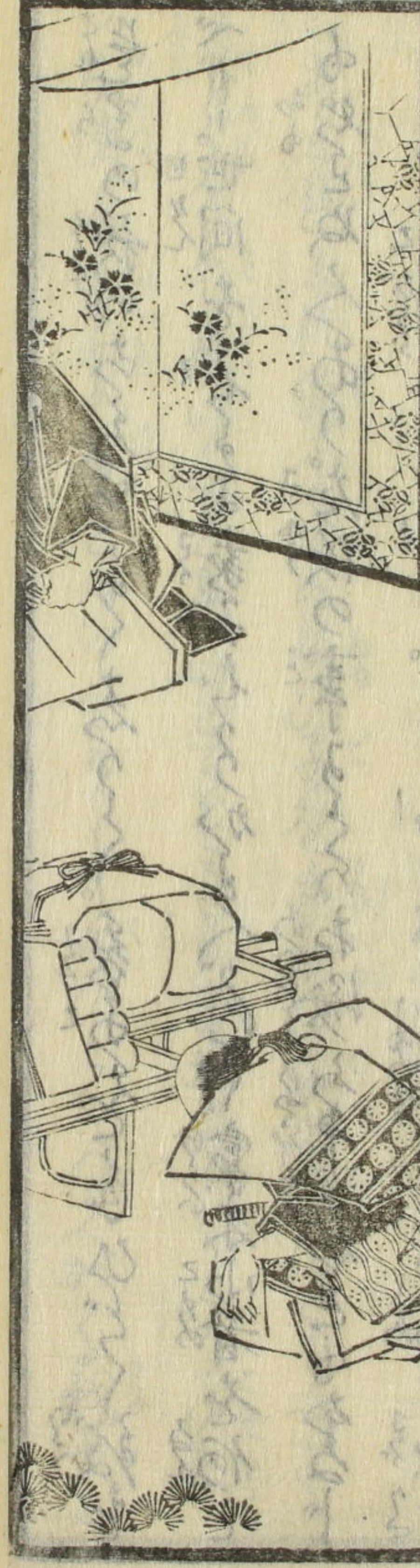
○あつてまじし。使ふ。人のあひまを。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
○まじし。を。角。い。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
○使ふ。自。孝。者。を。い。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ

これら 孝の秋のあつとまじし。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
べし。世間を。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
も。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
く。人の子室といふ事を。よく知るべし。出世せんが為。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
まじし。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
りまじし。人の秘儀を。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
あり。又。家。来。けん。ぞ。の。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
事を。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
まじし。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ
其功。随。心。賞。を。施。まじし。孝子より我まじしをさせまじし人自をさせ

日用心法金鏡卷中

五十一

夫の事柄公記は正成のいさし。常におらりとせいをべし。國家てあふ根柢あり。是か
 方よるこころおらりとせいで。争ひある者國のこまらげありとて。逃放し。又いさくろ
 あらば。貧乏はまらぬもの。金銀米穀等とらた。くさんこそぞ。商人等とふぢよ
 ありりやとよ。人民長めぐみのふきとらん。て。和とよ。赤子の母と志たふがごとし。
 又いさくおのれ一人とんで。万民あまよ
 けさき目とををべし。あまよ。まよ。たの
 み。まのあまよ。たの。天の。大
 事。まよ。べし。といり。是。相違
 あり。まよ。後。相持。すべし。作
 も。補。ふ。成。る。の。や。う。よ。ま。べし。
 あり。まよ。い。ひ。え。み。し。上。下。ま。よ。ま。よ。く



日用心法鏡依屏中

五十一

あふまどたふ。老角も人由家来由得女持子を思ひく。これ
 とおの道が苦まむるなり。家来が思ふのん。おのちがまゝ人へ無理
 をするのひと、は手もぬ人なりと。思ふが家来のくせなり。又ま
 人よ勤く君も内へ月日が長くして。今別家へ
 我身緒とるのめと。月日が短くする川。昔はまゝと
 る内へ益正がもてく。今へ益正五箇向がまゝと来
 く。一年もといふ。たふバ病ぐ夜長く。はくまゝと道遠くた
 の。む日へ。く。く。む日へ長。月日の長短へ家来よ
 あり。月日の方より。皆家来の速ひるなり。流るるは隨
 ぐ。水のちやれを。流るるは逆上。水のちやれを

知る。是比日。おのく。の。智より。怒る。や。天を。恨。人を
 恨む。大ひる。あやまり。なり。世家。身を。恨。又ま
 人の。思。か。ん。お。い。か。家。来。何。の。役。ま。ま。受。者。た。む。り
 と。思。ふ。く。人。の。く。せ。なり。家。来。の。悲。を。ま。ん。く。家。身。の
 非。を。知。り。と。家。身。我。子。む。り。か。あ。ひ。ぐ。の。く。家。来。の。身。乃
 う。く。終。末。の。み。を。る。ん。と。も。思。ふ。と。家。来。の。家。来。よ。大。功。あ
 る。を。ま。ん。く。ぬ。ま。ん。多。く。思。ふ。と。ま。ん。く。何。と。も。家。来
 の。身。の。上。に。あ。ひ。家。来。の。功。あ。る。事。を。ま。ん。く。其。恩。賞。成
 急。度。は。く。り。と。べ。し。和。倫。倍。ら。よ。源。の。高。貞。の。い。う。く。い
 け。の。道。よ。も。其。功。を。賞。ま。れ。ば。徒。よ。光。陰。を。送。る。者。な

一親一けむるも其意をまゝ味けむる言をまゝ者
 せらるる一とりりけ一車の上ゆたなり人たる者の
 大入用なり。家來をまゝ導くの大進なり。いかなる
 道も其功を賞せむは徒ら光陰を送る者なりといふ
 べきなり。入用なり。仕事を篤とせむべし。何卒家來乃
 賞をまゝめくまゝ。家來の忠をまげまゝとべし。又親疎を
 一賞四罰を真直とせむべし。賞罰あらざるは功をまげ
 むりたる一主人たる者ハ賞罰のよく當るやうとせむべし
 賞罰あらざるは功をまげまゝとせむべし。忠義をまげ
 けまゝとせむやうとする者なり。賞罰あらざるは忠義をまげ

む者多し。又その家來多くするは自然とあらう。治ま
 るるや。若賞罰あらざるは忠信智者のかくせむ。忠
 忠の者多くあらう。家來の中へ治りがく。是より何と
 賞罰のよくあらう。やうとせむべし。是より主人たる者の急度
 ちよとせむる。是より用ゆる。又賞の厚く罰のゆるく
 致せむべし。賞罰あらざるは民の足を置かぬ。一といふ聖
 治も考へぬ。又苛政のゆるく。虎のゆるく怒る。一といふ聖
 かるる。いかにあらう。あらう。若あつた。いかに
 あらう。疾を失ひ身をわろがむとべし。是よりた人の六
 入用急をむるを用ゆる。人を賞せむるをまげまゝとせむべし。

運を因く事なり。運をひらくもるる事なり。一は聖賢の

不は合するべし。聖神の造造別々のあり。善を賞せざる者人

まは悪を罰せざる者人ありぬ。善悪ひらくは時

忠信儀とりり。又其功もる。徳りみれりのみ。より

福をあへ。金銀を興へる時。功ある者。福をあへ。又

もあてて。の者。より。の。どく。る。ま。が。め。は。ら。し。る。こと

と。思。ひ。く。も。る。こ。も。ぬ。者。あり。と。あり。是。の。け。通。り。よ。る。ま。は

り。賞罰のよくあはる。やう。よ。ま。と。る。書。經。よ。い。く。ま

善を為者と。影。其不善を為者を。病。志。む。と。あり。

又いよく其明を陸。其幽を懸。黜け賞罰明信るれば。人

事功を力とあり。け。む。の。言。を。る。者。あ。げ。用。ひ。く。其。功。を

賞。悪ををる者。あり。ぞ。け。あ。ま。め。く。賞。罰。を。明。信

よ。せ。た。れ。ハ。善。進。む。者。なり。是。よ。の。功。あ。る。者。の。ハ

急。急。む。る。び。を。ま。ま。と。ぬ。と。い。ひ。の。あ。り。又。ま。人。なる。者。の。人

の。與。あ。る。を。ま。ま。と。ぬ。が。家。の。治。り。と。り。又。教。育。の。運。も

ひ。ら。く。事。なり。と。ま。る。べ。し。

和論語。源昌義候。佐竹の元証。の。い。ら。く。人。已。ま。く。加。く。他。人。よ

興。あ。る。む。る。た。め。の。ハ。運。を。ひ。ら。く。事。なり。お。の。こ。た。ら。し。め。り。の。ハ

運。を。ひ。ら。く。事。要。中。の。要。る。り。と。

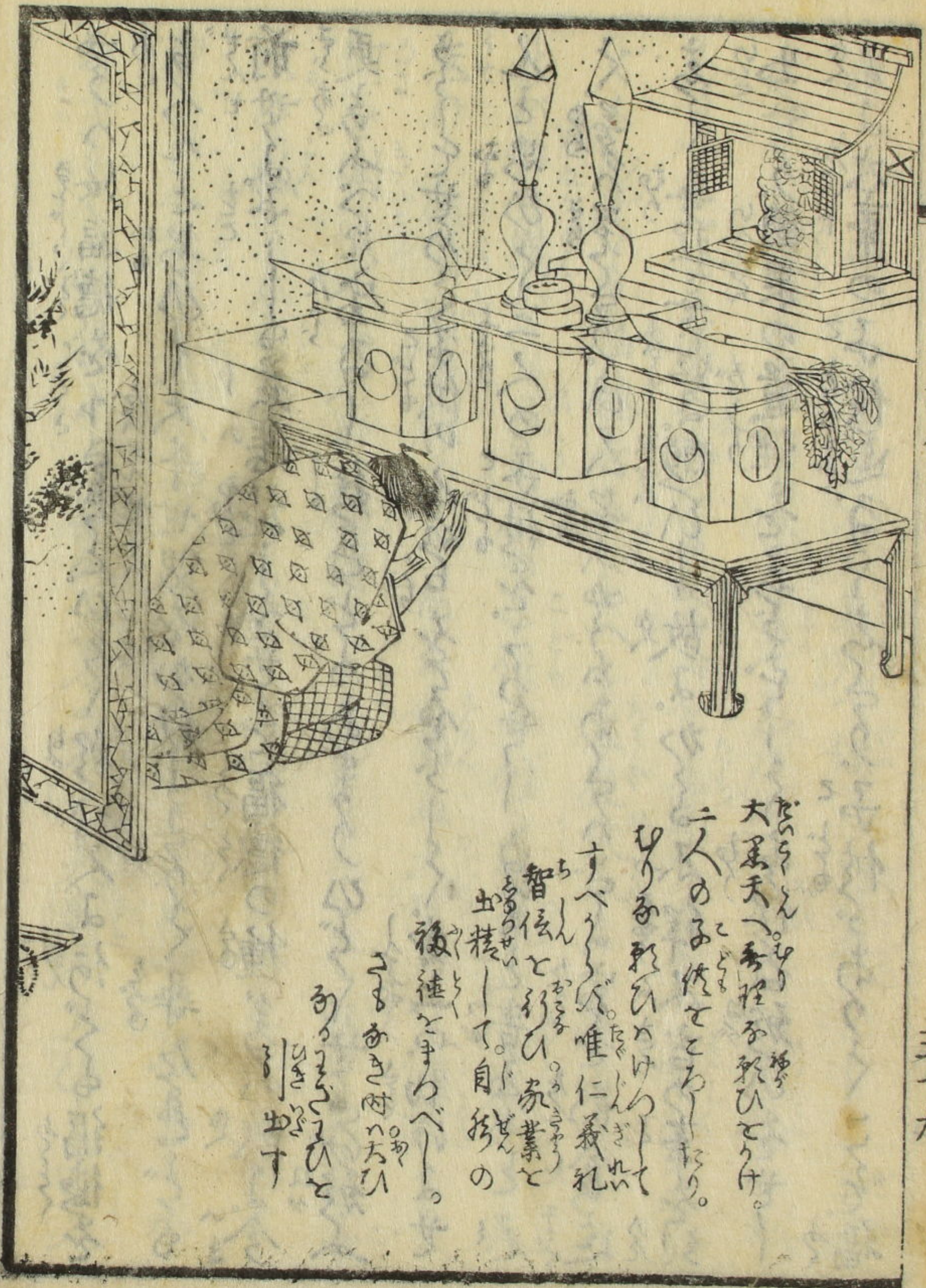
利口く富貴なる者も
 純ぶも富貴なる者も
 此世の前世の種次第
 富貴なる大小ある者も
 貧者も大小ある者も
 善悪二のたまはく種入
 田畑も変米時ごまへ
 変米少くの時あけへ
 果報も少くの時あけへ
 況やむごころも多しと
 純なる人の皆矣
 利口く多き者あり
 未だ此世の種次第
 時種大小ある者も
 非道も大小ある者も
 盛衰二のたまはく種入
 穀物取らるるためなり
 五升や壹斗の實なる者
 果報の倍くある物也
 果報も多しと思ふ者も

此世の前世の種次第
 富貴なる大小ある者も
 貧者も大小ある者も
 善悪二のたまはく種入
 田畑も変米時ごまへ
 変米少くの時あけへ
 果報も少くの時あけへ
 況やむごころも多しと
 純なる人の皆矣
 利口く多き者あり
 未だ此世の種次第
 時種大小ある者も
 非道も大小ある者も
 盛衰二のたまはく種入
 穀物取らるるためなり
 五升や壹斗の實なる者
 果報の倍くある物也
 果報も多しと思ふ者も



江戸の女房御用

ハ



江戸の女房御用

五十九

大黒天（おぼろ）の考程を教ひてうけ。
 二人の子供とてこゝろたり。
 ひりあねひのけのりて
 すべう（おぼろ）の唯仁義礼
 智信（おぼろ）と行ひの素業と
 出（おぼろ）精（おぼろ）して。自（おぼろ）後（おぼろ）の
 後（おぼろ）進（おぼろ）とまりべい。
 こもあき耐（おぼろ）のちひ
 あ（おぼろ）の（おぼろ）ひと
 ひ（おぼろ）とす

